

二〇一四年度 卒業論文

二河譬の研究

禁廠

コピー

L
山 1
下 1
 0
 ち 1
 な 2
 み 3

目次

序論

一 近代文学と「二河譬」

二 「二河譬」とは

本論

第一章 善導の説いた「二河譬」

第一節 「二河譬」の本文と意味

第二節 「二河譬」の出典

第三節 「二河譬」を設けた理由

第二章 親鸞における「二河譬」解釈

第一節 『教行信証』「信卷」における「二河譬」

第二節 『一念多念文意』における「二河譬」

第三節 『愚禿鈔』における「二河譬」

第三章 他宗派における「二河譬」解釈

第一節 真宗の「二河譬」解釈

第二節 浄土宗他派の「二河譬」解釈

..... 1

..... 1

..... 2

..... 2

..... 2

..... 2

..... 0

..... 4

..... 5

..... 6

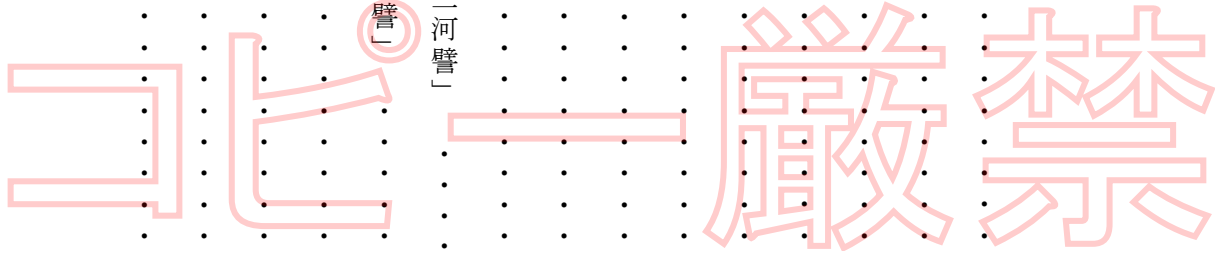
..... 7

..... 8

..... 0

..... 1

..... 2



結論
第三節 真宗と浄土宗他派の「二河譬」解釈の違い
2 2
4 3

註
参考文献

コピ—廠禁

序論

一 近代文学と「二河譬」

本論において「二河譬」を研究しようとしたきっかけに、岡本かの子（一八八九～一九三九）の『快走⁽¹⁾』という作品がある。岡本かの子はもともとキリスト教信者であったが、参禅から大乘仏教の教えに深く帰依した。岡本かの子の文学は仏教観を背景として、何事かにひたむきに没頭する人物が多く描かれている。

彼女の『快走』という文学には、「二河譬」という言葉は出てこないが、明らかに「二河譬」を下敷きにした文章が出てくる。このようなことから近代文学においても「二河譬」が影響を与える力を持っていることを知った。また、少なくなったようではあるが、現代においても「二河白道図」を用いて説教をする「絵説き」が行われているようであるし、水木しげるの「二河白道図」など、この「二河譬」が広く注目されていることに興味を持った。

そこで、「二河譬」とは何か、また「二河譬」の解釈について、親鸞聖人（以下親鸞と称す）の解釈や浄土宗他派の解釈をもとに、その意味・意義を探ってみたいと考えるようになったのが本論のテーマに「二河譬」を選んだきっかけである。

二 「二河譬」とは

「二河譬」とは、善導大師（以下善導と称す）の『観経疏』「散善義」（以下『散善義』と示す）に著される「二河白道の譬喩」（以下「二河譬」と示す）のことである。

この譬喩は、浄土教における代表的な譬喩の一つであり、その物語とともに「浄土変相図」や「来迎図」などと同様に、「二河白道図」が用いられて、伝道布教活動などにも広く活用されてきたようである。「二河譬」の概要は本論の第一章で述べることにするが、「二河譬」は長い歴史の中で様々な場面で用いられ、現代に至っているのである。

しかし、同時にこの「二河譬」について、真宗の解釈と浄土宗他派の解釈に違いがあることもわかってきた。そこでこの譬喩の解釈の違いなども考察し、それによって親鸞の教義の特色をより明確にしていくことができるというところに、本研究の意義があると思われるのである。

本論

第一章 善導の説いた「二河譬」

第一節 「二河譬」の本文と意味

この善導（六一三〜六八二）の「二河譬」がどのように著されているのか、ここでは本文と意味を示しておく。また、本文の便宜上、本文に数字を記しておくことにする。

一 又一切の往生人等に白さく、今更に行者の為に一の譬喩を説きて、信心を守護して、以て外邪異見の難を防がむ。

二 何者か是なるや。譬へば、人有りて西に向かひて百千の里を行かむと欲するがごとし。忽然として中路に二の河有るを見る。一には是火の河、南に在り。二には是水の河、北に在り。二河各闊さ百歩、各深くして底無し。南北辺無し。正しく水火の中間に一の白道有り。闊さ四五寸ばかりなるべし。

此の道東の岸より西の岸に至るに、亦長さ百歩、其の水の波浪交はり過ぎて道を湿し、其の火炎亦来りて道を焼く。水火相交はりて常にして休息すること無し。此の人既に空曠の廻かなる処に至るに、更に人物無し。多く群賊・悪獣有りて、此の人の単独なるを見て、競ひ来りて殺さむと欲す。此の人死を怖れて直ちに走りて西に向かふに、忽然として此の大河を見て、即ち自ら念言す。此の河は南北に辺畔を見ず。白の中間に一道を見るも、極めて是狭小なり。二の岸相去ること近しと雖も何に由りてか行くべき。今日定めて死すること疑はず。

正しく到り回らむと欲すれば、群賊・悪獣漸漸に來り逼む。正しく南北に避り走らむと欲すれば、悪獣・毒虫競ひ来りて我に向かふ。正しく西に向かひて道を尋ねて去かむと欲すれば、復恐らくは此の水火の二河に墮せむと。

時に当りて惶怖すること復言ふべからず。即ち自ら思念す。我今回らば亦死せむ。住まらば亦死せむ。去かば亦死せむ。一種として死を勉れずは、我寧ろ此の道を尋ねて前に向かひて去かむ。既に此の道有り。必ず度るべしと。此の念を作す時、東の岸に忽ち人の勸むる声を聞く。仁者、但決定して此の道を尋ねて行け、必ず死の難無からむ。若し、住まらば、即ち死せむと。

又西の岸の上に人有りて喚ばひて言はく、汝一心正念して直ちに來れ。我能く汝を護らむ。衆て水火の難に墮することを畏れざれと。此の人既に此に遣はし、彼に喚ばふを聞きて、即ち自ら身心を正当して、決定して道を尋ねて直ちに進みて、疑怯退心を生ぜず。或いは行くこと一分二分するに、東の岸に群賊等喚ばひて言はく、仁者、回り來れ。此の道嶮惡にして過ぐることを得ず。必ず死すること疑はず。我等衆て惡心をもて相向かふこと無しと。此の人喚ばふ声を聞くと雖も亦回顧せず。一心に直ちに進みて道を念じて行けば、須臾に即ち西の岸に到りて、永く諸々の難を離る。善友相見えて慶樂すること已むこと無し。此れは是喻へなり。

三 次に喩へを合せば、東の岸と言ふは、即ち此の娑婆の火宅に喩ふ。西の岸と言ふは、即ち極樂の宝国に喩ふ。群賊・惡獸詐り親しむと言ふは衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩ふ。無人空迥の沢と言ふは、即ち常惡友に随ひて眞の善知識に値はざるに喩ふ。水火二河と言ふは、即ち衆生の貪愛は水のごとく、瞋憎は火のごとくなるに喩ふ。

中間の白道四五寸と言ふは、即ち衆生の貧瞋煩惱の中に能く清淨の願往生心を生ずるに喩ふ。乃ち貪瞋強

きに由るが故に即ち水火のごとしと喩ふ。善心微なるが故に白道のごとしと喩ふ。又水波常に道を湿すと云ふは、即ち愛心常に起りて、能く善心を染汚するに喩ふ。又火炎常に道を焼くと言ふは、即ち瞋嫌の心よく功德の法財を焼くに喩ふ。人道の上を行きて直ちに西に向かふと言ふは、即ち諸々の行業を回して直ちに西方に向かふに喩ふ。

東の岸に人の声の勧め遣はずを聞きて、道を尋ねて直ちに西に進むと言ふは、即ち釈迦已に滅したまひて、後の人見たてまつらざれども、由教法有りて尋ねべきに喩ふ。即ち之を声のごとしと喩ふ。

或いは行くこと一分二分するに群賊等喚ばひ回すと言ふは、即ち別解・別行・悪見人等妄りに見解を説きて迭ひに相惑乱し、及び自ら罪を造りて退失するに喩ふ。西の岸の上に人有りて喚ばふと言ふは、即ち弥陀の願意に喩ふ。

須臾に西の岸に到りて善友相見えて喜ぶと言ふは、即ち衆生久しく生死に沈みて、曠劫より輪回し、迷倒して自ら纏ひて、解脱するに由無し。仰ぎて釈迦發遣して指して西方に向かはしめたまふことを蒙り、又弥陀悲心をもて招喚したまふに籍りて、今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念念に遣るること無く、彼の願力の道に乗じて、捨命以後彼の国に生ずることを得て、佛と相見えて慶喜すること何ぞ極まらむと言ふに喩ふるなり(二)。

右の本文は大きく三段に分けて見ることができぬ。すなわち、一の段はこの譬喩を設けた理由が示してあり、
二の段は「二河譬」そのものである。そして、三の段は「二河譬」を法義に合わせた合法の段落である。

「の段と目の段は後に詳しく見ていくことにして、目の「二河譬」そのものを理解するにあたり、意識を示しておく。

はてしない荒野を、ただ一人、西に向かって歩みつづける旅人がいた。あたりには人かげもなく、身を寄せる場所もない。ただ空漠とした荒野がどこまでもひろがっているばかりである。

旅人は、突如、背後に異様なざわめきを感じてふりかえると、はるか後方から刀をふりかざした盗賊の群が追いかけてくるのがみえた。それだけではない。うしろの左右からは、獐猛な野獣や、兇悪な毒蛇が、この孤独な旅人をえじきにしようと先をあらそっておそいかかってくるではないか。

旅人は恐怖にふるえながら必死に西へ走る。そのとき、忽然として火の河と、水の河が行く手をさえぎって延々と横たわっているのに気づいた。

まるで噴火口のように底なしの大地のわれ目から燃えあがって、焰々と空をこがしている火の河は、南の方に際限もなくつづいているし、一方、これも底しれぬ深さをもった水の河は、さかまく濁流をたたえて、北にむかつてはてしなく流れている。河の幅は百歩ばかりだが、その光景は目もくらむばかりである。

二河の交わる中間に、一筋の白道が見えかくれしながら、東岸から西岸へ、細々とのびている。けれどもその幅はわずか四、五寸のひろさしかない。そのうえ水の河からまきおこる激浪に、いま洗われたかと思うと、つぎの瞬間には、火の河から吹きあげる猛焰につつまれて、あれどもなきに等しく、とても人の渡って行けそうには見えない。

旅人は逃げ道をさえぎられて、どうしようもない窮地に追いつめられた。

「この河は南にも北にも、ほとりなくひろがっていて渡るところはどこにもない。それに中間の白道は渡るには狭すぎる。渡ろうとしても、所詮、火の中に転落するか波浪にまきこまれるか、死をまぬがれることはできない。うしろへかえれば、群賊に斬り殺されるにちがいないし、南北に逃げてみても、悪獣、毒蛇のえじきになるばかりだ。とってこのままじっとしているのは、空しく死を待つだけだ。もはや私には生きのびる道は断たれているのか」

いいしれぬ恐怖と焦燥にかりたてられながら、必死に思案をめぐらすが、もとより逃げ場はどこにもみあたらない。

死の時は、ようしやなくせまってくる。

一刻の猶予も許されない絶体絶命の窮地にたたしめられて、旅人は不安におののきながら決断する。

「我いまかえらばまた死せん。とどまらばまた死せん、ゆかばまた死せん。一種として死をまぬがれずんば、我、むしろ此の道をたずねて、前に向ってゆかん。すでにこの道あり、必ずまさに渡るべし」

逃げて死、じつと手をこまねいても死、進んでも死、どの道も死をまぬがれぬのなら、むしろ進もう。前向きの死をえらぼう。そこにはかすかながら道がある。私の目には渡れそうには見えないけれども、もしかしたら、いや、きっと渡れるだろう。この道に自分のすべてをゆだねてみよう、こう思いつめて旅人は道に向かうのだった。

そのとき、突如として東の岸から、この道をすすめる人の声がさわやかに聞こえてきた。

「きみ、ただ決定して、此の道をたずねて行け、必ず死の難なけん。若しとどまらばすなはち死せん」

此の道は死への道ではなく、死を越えていく永遠の生命への道だ、安心してゆけ、といわれるのである。

この声と重なるようにして、水火二河の彼方から、この人を招き喚ぶ声がひびいてきた。

「汝、一心、正念して、直ちに來たれ、我よく汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことをおそれざれ」

旅人は、こちらから「往け」とすすめる声と、かなたから「來たれ」とよぶ声に、よびさまされて、ため

らい疑う心を破られ、身も心も、おおせにまかせて白道上の人となつてゆく。外からながめていたときは、

あるかなきかの細々とした道でしかなかった白道が、御声につつまれて歩みだしてみると、火にも焼かれず、

水にもおぼれぬ、ゆるぎなき大道であることを知る。白道をゆく旅人には、もうおびえも、たじろぎもない。

一步、二歩と力強く往きははじめた旅人の背後から、東岸までせまってきた群賊が口々によびかえず。

「きみ、かえりたまえ、此の道は険悪だから必ず墮落して死ぬにちがいない。我々は決して悪心のあるも

のではないから、心配せずに帰りたまえ」

しかし、旅人は、もはやその誘いに耳をかさず、何のためらいもなく、ただ一心に道を念じて白道を歩み

つづけるのであった。

火焰はもえつづけているし、濁流はうずをまいて身辺にせまりつづけるが、西岸上のひとに護念されてい

る旅人を、その火も、その水もそこなうことはできない。

こうして水火をかえりみず、群賊のさそいにもたじろがず、百歩の白道をゆきつくした旅人は、群賊の刀もとどかず、悪獣の牙も及ばない西の彼岸にいたりつき、よき人々とめぐりあつて永遠の安らぎをえたというのである(3)。

ここまでが「二河譬」のあらまし、つまり、本文Bの意識である。

「二河譬」の大意を理解するために、すでに善導が合法を示しているが、本文Dの合法を解説しておこう(4)。まず、「東の岸と言ふは、即ち此の娑婆の火宅に喩ふ。西の岸と言ふは、即ち極樂の宝国に喩ふ。」では、東の岸を此土(穢土)に、西の岸を彼土(浄土)に喩えている。「群賊・悪獣詐り親しむと言ふは衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩ふ。」とは、衆生の存在とその環境を示し、「無人空迥の沢と言ふは、即ち常悪友に随ひて真の善知識に値はざるに喩ふ。水火二河と言ふは、即ち衆生の貪愛は水のごとく、瞋憎は火のごとくなるに喩ふ。」とは出離の縁が無い衆生のことを表わしている。

次に「中間の白道四五寸と言ふは、即ち衆生の貪瞋煩惱の中に能く清浄の願往生心を生ずるに喩ふ。乃ち貪瞋強きに由るが故に即ち水火のごとしと喩ふ。善心微なるが故に白道のごとしと喩ふ。」とは、衆生の機相にあらわれる貪欲・瞋恚の煩惱を水火の二大河に喩え、本来は広大無碍なる信心であるのに、衆生の生活上の心相にあらわれる微々たる信心を白道四五寸の狭さに喩えたと見られる。「人道の上を行きて直ちに西に向かふと言ふは、即ち諸々の行業を回して直ちに西方に向かふに喩ふ。」とは、自力の善根功德を積んで行こうとした心を「回心」し、西へと向かうと解釈できる。

「東の岸に人の声の勧め遣はずを聞きて、道を尋ねて直ちに西に進むと言ふは、即ち釈迦已に滅したまひて、後の人見たてまつらざれども、由教法有りて尋ねべきに喩ふ。即ち之を声のごとしと喩ふ。」とは、釈迦が浄土へと「発遣」されることを喩えている。「或いは行くこと二分二分するに群賊等喚ばひ回すと言ふは、即ち別解・別行・悪見人等妄りに見解を説きて迭ひに相惑乱し、及び自ら罪を造りて退失するに喩ふ。」とは、外からの難を喩えており、「別解・別行」という異解の人々が惑わし、「悪見人」が惑乱し自ら退失することを示す。「西の岸の上」に人有りて喚ばふと言ふは、即ち弥陀の願意に喩ふ。」とは、弥陀が招喚されることを喩えている。ここで、「信心」が成立したことを示す。

最後に「須臾に西の岸に到りて善友相見えて喜ぶと言ふは、即ち衆生久しく生死に沈みて、曠劫より輪回し、迷倒して自ら纏ひて、解脱するに由無し。仰ぎて釈迦発遣して指して西方に向かはしめたまふことを蒙り、又弥陀悲心をもて招喚したまふに籍りて、今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念念に遣ること無く、彼の願力の道に乗じて、捨命以後彼の国に生ずることを得て、佛と相見えて慶喜すること何ぞ極まらむと言ふに喩ふるなり。」とは、前の「信心」によって「利益」を得るということを喩えられたものであると考えられる。以上が本文の合法的な理解である。

第二節 「二河譬」の出典

では、善導は何によってこの「二河譬」を作ったのか。古来、「二河譬」の出典には諸説あることが指摘されている⁽⁵⁾。ここではその諸説を挙げていく。

善導の師である道綽禪師の『安樂集』卷上二大門⁽⁶⁾、また源信和尚の『往生要集』⁽⁷⁾にも引用されている、『略論安樂浄土義』⁽⁸⁾に依るといふ説。また、鎮西派・良忠の『散善義伝通記』⁽⁹⁾には、『涅槃経』卷二十三⁽¹⁰⁾及び『大智度論』卷三十七⁽¹¹⁾に依るといふ。西山派・覚融の『散善義私記』⁽¹²⁾や真宗・存覚の『法華問答』⁽¹³⁾も『大智度論』に基づくと説く。西山派深草流・道教顕意の『散善義楷定記』⁽¹⁴⁾は『法華経』⁽¹⁵⁾に依ると説き、この『散善義楷定記』は法華・涅槃両経に意をとっていると述べる。義教の『愚禿鈔摸象記』⁽¹⁶⁾は、『雜阿含経』卷四十三⁽¹⁷⁾が「二河譬」に近いと指摘している。また、これを転用して大乘の譬喩としたという。智暹の『愚禿鈔樹心録』⁽¹⁸⁾は『宝積経』卷一〇七⁽¹⁹⁾に依ると説いた。西山派祖・証空の『散善義観門要義鈔』⁽²⁰⁾および大谷派の香月院深励の『観経散善義講義』⁽²¹⁾等は『観無量寿経』一経の意に依り、その相は『安樂集』『涅槃経』『智度論』などに依ったとする。本願寺派・僧鎔の『一滞録』⁽²²⁾、善護の『敬信記』⁽²³⁾道隱などは『観経』一部の説相に基づくもので、二尊遣喚は第七観に依ると述べる。義経の『愚禿鈔摸象記』⁽²⁴⁾にも『観経』第七観との対応を詳細に示されている。以上を整理して列記すると、

- (A) 『略論安樂浄土義』の「渡河着脱」の譬喩⁽²⁵⁾。
- (B) 『涅槃経』卷二十三の「一匝四蛇」の譬喩⁽²⁶⁾。
- (C) 『智度論』卷三十七の「両辺水火」の譬喩⁽²⁷⁾。

(D) 『法華経』 譬喩品の「火宅」の譬喩⁽²⁸⁾。
(E) 『雑阿含経』 卷四十三の「灰河」の譬喩⁽²⁹⁾。

(F) 『宝積経』 卷一〇七「大乘方便会」に出る「大餓空澤」の譬喩⁽³⁰⁾。

(G) 『観無量寿経』 一経の意に依る⁽³¹⁾。

(H) 『観無量寿経』 第七華座観の住立空中尊の意味に依る⁽³²⁾。

といった経論が挙げられ、これらの譬喩はいずれも「二河譬」とよく似た要素がある。例えば、(A) 『略論安楽浄土義』の「渡河着脱」の譬喩とは、

喩へば人ありて空曠の廻かなる処にして怨賊の刃を抜き、勇を奮つて直ちに來たりて殺さんと欲するに、その人到走して一河を渡るべきを視る。もし河を渡ることを得ば首領全かるべし。その時ただ河を渡る方便を念ず、われ岸に至れば衣を着して渡るとやせん。衣を脱ぎて渡るとやせん。もし衣納着せば恐らくは過ぐることを得ざらん、もし衣納を脱がんには恐らくは暇を得ること無けん。ただこの念のみありてさらに他縁なし、もつばら如何にして河を渡るべきやを念ず。即ち是れ一念なり⁽³³⁾。

という譬喩で、浄土を願つて一心に念仏していく者の心情をあざやかに喩えられている。

(B) 『涅槃経』 卷二十三の「一医四蛇」の譬喩を要約すると、むかし四匹の毒蛇を飼っている王がいた。王は毒蛇を一つのハコに入れて、臣下に飼育を命じた。それも、一匹でも怒らすと殺すというのである。臣下はともできないことだと逃亡した。それを知った王は、すぐに五人の刺客を追わせて臣下を殺させようとした。五

人の刺客は油断させようと味方のように偽ったが、臣下は信じず、ひたすら逃げる。一つの村にたどり着いたが、人も物もない。その時、空中に声がして、彼によびかける。この村にいと命はないというので、すぐに村を飛び出し、逃げていくとゆく手を阻む大きな河に出くわした。船も橋もないので草や木を集め、筏を作った。だが、この筏では沈んでしまうだろう、しかし、猶予はない。臣下はどうせ死ぬのならば、進んで死ぬ方がいいと決断し、河を渡っていくと、流れを乗り切り安穩な彼岸に達し、あらゆる恐怖から解放されたというものである。

これが「一匝四蛇」の譬喩のあらましである。この譬喩の素材としては「二河譬」と共通するものが多い。

また、(G)『観無量寿経』一経の意に依るとは、「西山派祖・証空の『散善義観門要義鈔』および大谷派の香月院深励『観経散善義講義』等にいう説で、深励は二河白道は『観経』全体の趣旨を譬喩したもので、趣意は『観経』一経によりその言葉(説相)は『安樂集』『涅槃経』『智度論』などによったとする。⁽³⁴⁾」また、僧叡『随聞記⁽³⁵⁾』もこの説を取る。本願寺派の僧鎔『一諦録』、善護『敬信記』、道隱などは『観経』一部の説相に基づくもので、二尊遣喚は第七華座観に依ると述べる。

(H)『観無量寿経』第七華座観の住立空中尊の意味に依るとは、義経の『愚禿鈔摸象記』では『観無量寿経』華座観のはじめに釈尊が韋提希に告げて「汝がために苦悩を除く法を説くべし⁽³⁶⁾」と言うと、そこに出現した弥陀が「招喚」の勅命であり、釈尊が苦悩を除く法を説くと言ったのが「発遣」であるというもの。

以上が「二河譬」の出典の諸説である。このように様々な譬喩が「二河譬」の背景にあることが分かる。しかし、どの譬喩もあらかず法義内容は「二河譬」と異なることを確認しておかなければならない。したがって「二

河譬」はこれらの譬喩を素材としながらも、『観経』の第七華座観に依ると見ることができると考える。

第三節 「二河譬」を設けた理由

では、善導は何のために「二河譬」を設けたのか。その答えについては、第一節「二河譬」の本文・一の部分、つまり譬喩のはじめに「また一切の往生人等に白さく、今更に行者の為に一の譬喩を説きて、信心を守護して、以て外邪異見の難を防がむ」とある。

つまり「行者の信心を守護して、以て外邪異見の難を防ぐ」ためであるといい、これは「信心守護の喩」とも言われる所以であるが、「信心を守護する」とは、どのような意味があるのだろうか。「信心を守護する」とは、「二河譬」では発遣・招喚の声を聞く時から西岸に渡り、善友に相見えるまで、すなわち初起の信心開発から浄土往生までの全ての「信心を守護する」と言える。また、「信心を守護する」に対し「外邪異見の難を防ぐ」とある。「外邪異見の難」とは、善導においては古今の聖道の諸師を示していると考えられる。すなわち、本願念仏の道を妨げる者から「守護する」ためであると見ることができると言える。

また、善導は「二河譬」を説かれる直前に次のような問答を挙げられている。

問うてはいはく、もし自力の道を歩む人や、解行不同的人等がありて、来りてあひ惑乱して、あるいは種々の疑難を説きて（往生を得じ）といひ、あるいはいはん、（なんだち衆生、曠劫よりこのかた、および今生の

身口意業に、一切凡聖の身の上において、つぶさに十悪・五逆・四重・謗法・闡提・破戒・破見等の罪を造りて、いまだ徐尽することあたはず。しかるにこれらの罪は三界惡道に繫属す。いかんぞ一生の修福念仏をして、すなはちかの無漏無生の国に入りて、永く不退の位を証悟することを得んや」と。

答へてはいはく、諸仏の教行教塵沙に越えたり。識を菓くる機縁、情に随ひて一つにあらざ。たとへば世間の人、眼に見るべく信ずるべきがごときは、明のよく闇を破し、空のよく有を含み、地のよく載養し、水がよく生潤し、火のよく成壞するがごとし。これらのごときの事、ことごとく待対の法と名づく。すなはち目に見つべし、千差万別なり。いかにいはんや仏法不思議の力、あに種々の益なからんや。随ひて一門を出づるは、すなはち一煩惱の門を出づるなり。随ひて一門に入るは、すなはち一解脱智慧の門に入るなり。ここを為（為の字、定なり、用なり、彼なり、作なり、是なり、相なり）つて縁に随ひて行を起して、おのおの解脱を求めよ。なんぢなにをもつてか、いまし有縁の要行にあらざるをもつて、われを障惑する。しかるにわが所愛はすなはちこれわが有縁の行なり、すなはちなんぢが所求にあらず。このゆゑにおのおの所樂に随ひてその行を修するは、かならず疾く解脱を得るなり。行者まさに知るべし、もし解を学ばんと欲はば、凡より聖に至るまで、乃至仏果まで、一切礙なし、みな学ぶことを得よ。もし行を学ばんと欲はば、かならず有縁の法によれ。少しき功勞を用ゐるに、多く益を得ればなりと⁽³⁷⁾。

善導は、念仏者を妨げるものたちが念仏者を破滅に導くような議論にまどわされてはならないとした。このことから善導は念仏者の信心を守り、道を見失わないようにと「二河譬」を設けたと考えられる。

第二章 親鸞における「二河譬」解釈
第一節 『教行信証』「信巻」における「二河譬」

親鸞はこの「二河譬」をどのように解釈されたのかについて考察してみたい。親鸞は「二河譬」について、『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』と示す）「信巻」⁽³⁸⁾、『一念多念文意』⁽³⁹⁾、『愚禿鈔』⁽⁴⁰⁾、『浄土文類聚鈔』⁽⁴¹⁾、『高僧和讃』⁽⁴²⁾において、「二河譬」を引用または解釈しており、また消息⁽⁴³⁾にも見ることができ。ここでは、『教行信証』「信巻」、『一念多念文意』、『愚禿鈔』における「二河譬」の解釈を見ていきたい⁽⁴⁴⁾。

まず、『教行信証』「信巻」における「二河譬」の解釈について、親鸞は『教行信証』「信巻」大信釈において、親鸞独自の観点から「二河譬」を引用している。また、欲生釈において、善導の『散善義』廻向発願釈の文を引用した後に「白道四五寸」と「能生清浄願心」を解釈して、

まことに知んぬ、二河の譬喩のなかに「白道四五寸」といふは、白道とは、白の言は黒に対するなり。白はすなはちこれ選択摂取の白業、往相回向の浄業なり。黒はすなはちこれ無明煩惱の黒業、二乗・人・天の雑善なり。道の言は路に對せるなり。道はすなはちこれ本願一実の直道、大般涅槃、無上の大道なり。路はすなはちこれ二乗・三乗、万善諸行の小路なり。四五寸といふは衆生の四大五陰に喩ふるなり。「能生清浄願心」といふは、金剛の真心を獲得するなり。本願力の回向の大信心海なるがゆゑに、破壊すべからず。これを金剛のごとしと喩ふるなり⁽⁴⁵⁾。

と示している。「白道四五寸」を「白道」と「四五寸」に分けて解釈しており、「白道」において、「白」に対して「黒」、「道」に対して「路」と区別している。「白」とは「選択摂取の白業、往相回向の浄業」つまり阿弥陀仏のはたらき、「阿弥陀仏が選択回向した、浄土に往生するための清浄の南無阿弥陀仏⁽⁴⁶⁾」のことであり、「黒」とは「無明煩惱の黒業、二乗・人・天の雑善」つまり「衆生の煩惱、また雑善⁽⁴⁷⁾」のことであると示す。「四、五寸」とは、衆生の四大・五陰に譬えたもので、自力万行の路であると「黒」と重ねて解釈している。そして、「能生清浄願心」とは、煩惱の身に本願力廻向の金剛の信心を獲得すると解釈されている。

第二節 『一念多念文意』における「二河譬」

次に『一念多念文意』には

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。かかるあさましきわれら、願力の白道を二分二分やうやうづつあゆみゆけば、無礙光仏のひかりの御ころをさめとりたまふがゆゑに、かならず安樂浄土へいたれば、弥陀如来とおなじく、かの正覚の華に化生して大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり。これを「致死凡夫念即生」と申すなり。二河のたとへに、「二分二分ゆく」といふは、一年二年すぎゆくにたとへたるなり。諸仏出世の

直説、如来成道の素懐は、凡夫は弥陀の本願を念せしめて即生するをむねとすべしとなり⁽⁴⁸⁾。
と善導『法事讃』の「致使凡夫念即生」の解釈において「二河譬」について触れられている。

「凡夫」は無明煩惱が身に満ち、臨終までとどまることなく消えないことは二河譬にも示されてある通りで、
そのようなあさましいわれらも、願力の白道を歩む身となれば、阿弥陀仏の光に摂め取られて正定聚の位に
就いているので、必ず浄土に生れて大般涅槃のさとりを得るといふ⁽⁴⁹⁾。

これらが『一念多念文意』における「二河譬」の解釈である。

第三節 『愚禿鈔』における「二河譬」

『愚禿鈔』巻下では、「二河譬」にある「百歩」「群賊・悪獣」「つねに悪友に随ふ」「(無人空廻の沢)」といふは、
悪友なり。真の善知識に値はざるなり」「白道四五寸」「能生清浄願往生心」「あるいは行くこと一分二分す」「悪
見人等」「また、西の岸の上に人ありて喚ばうていはく、(汝一心正念にしてただちに来れ、我能く護らん)」「念
道」「慶楽」「仰いで釈迦発遣して指へて西方に向かへたまふこと蒙る」「また弥陀の非心招喚したまふ」「いま二
尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念々に遣るることなく、かの願力の道に乗ず」について順に丁寧な解釈
がされている。

二河のなかについて、「一つの譬喩を説きて信心を守護して、もつて外邪・異見の難を防がん」と、「この

道東の岸より西の岸に至るまで、また長さ百歩なり」と。「百歩」とは、人寿百歳に譬ふるなり。

「群賊・悪獣」とは、「群賊」とは、別解・別行・異見・異執・悪見・邪心・定散・自力の心なり。「悪獣」とは、六根・六識・六塵・五陰・四大なり。「つねに悪友と随ふ」といふは、「悪友」とは、善友に対す、雑毒虚仮の人なり。「(無人空廻の沢)」といふは、悪友なり。真の善知識に値はざるなり」となり。(中略)

「白道四五寸」といふは、「白道」とは、白の言は黒に対す、道の言は路に対す、白とはすなはちこれ六度万行、定散なり。これすなはち自力小善の路なり。黒とは、すなはちこれ六趣・四生・二十五有・十二類生の黒悪道なり。「四五寸」とは、四の言は四大、毒蛇に喩ふるなり。五の言は五陰、悪獣に喩ふるなり。

「能生清淨願往生心」といふは、無上の信心・金剛の信心を發起するなり、これは如来回向の信樂なり。「あるいは行くこと一分二分す」といふは、年歳時節に喩ふるなり。

「悪見人等」といふは、驕慢・懈怠・邪見・疑心の人なり。

「また、西の岸の上に人ありて喚ばうていはく、(汝一心正念にしてただちに來れ、我能く護らん)」といふは、「西の岸の上に人ありて喚ばうていはく」といふは、阿弥陀如来の誓願なり。「汝」の言は行者なり、これすなはち必定の菩薩と名づく。龍樹大士『十住毘婆沙論』(易行品)にいはく、「即時入必定」となり。曇鸞菩薩の『論』(論註・上)には「入正定聚之数」(意)といへり。善導和尚は、「希有人なり、最勝人なり、妙好人なり、好人なり、上々人なり、真仏弟子なり」(散善義・意)といへり。「一心」の言は、真実の信心なり。「正念」の言は、選択摂取の本願なり。また第一希有の行なり、金剛不壞の心なり。「直」の言は、回

に對し、迂に對するなり。また「直」の言は、方便假門を捨てて如来大願の他力に歸するなり、諸仏出世の直説を躰さしめんと欲してなり。「來」の言は、去に對し往に對するなり。また報土に還來せしめんと欲してなり。「我」の言は、尽十方無碍光如来なり、不可思議光仏なり。「能」の言は、不堪に對するなり、疑心の人なり。「護」の言は、阿弥陀仏果成の正意を躰すなり、また撰取不捨を形すの貌なり、すなはちこれ現生護念なり。「念道」の言は、他力白道を念ぜよとなり。「慶樂」とは、「慶」の言は印河の言なり。護得の言なり。

「樂」の言は悦喜の言なり。歡喜踊躍なり。「仰いで釈迦發遣して指へて西方に向かへたまふこと蒙る」(散善義)といふは、順なり。「また弥陀の非心招喚したまふによる」といふは、信なり。「いま二尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念々に遣るることなく、かの願力の道に乗ず」といへり⁵⁰。

と解釈しており、『教行信証』「信卷」と同様に「白」に對して「黒」、 「道」に對して「路」と區別しているところは特徴的なところである。また、「白道四五寸」の全体が欲生積における「黒路」に對応しており、自力の回向発願心を意味する。この『愚禿鈔』では、善導に従いながら「清淨願心」が「如來回向の信樂」であると明かされている。

以上が親鸞の、『教行信証』「信卷」、『一念多念文意』、『愚禿鈔』における「二河譬」の解釈である。第二章の始めにも記したが、親鸞の「二河譬」引用例は多く、独自の観点から「二河譬」を引用されている。また、親鸞のこれまで述べてきた「二河譬」解釈から親鸞が「二河譬」の研究・解釈に力を入れていたということが分かる。

第三章 他宗派における「二河譬」解釈

第一節 真宗の「二河譬」解釈

真宗の諸学者も「二河譬」を解釈しているが、その解釈には、諸説・異論も存在している。しかし、「二河譬」解釈において共通する解釈や立場も存在している。ここでは真宗の「二河譬」の解釈の特色について見ていきたい⁽⁵¹⁾。真宗における共通の「二河譬」解釈とは、次の四つが挙げられる。

(一) 「二河譬」を三心即一⁽⁵²⁾の「深心」の譬喩と見ること。

「二河譬」の文の始めに「信心を守護して」とあるが、その「信心」とは『観無量寿経』では九品段の最初、至誠心・深心・回向発願心の三心を言い、『無量寿経』の本願では至心・信樂・欲生の三心を言う。

この三心は本願では至心と欲生は中間の「信樂」一心におさまる三心即一の信心であるとし、『観無量寿経』の三心も至誠心・回向発願心は中間の「深心」におさまるとする。

真宗において、「信心を守護して」の「信心」は第二の深心（信樂）であると理解されている。

(二) 貧瞋の煩惱が白道をさまたげることはないということ。

「二河譬」の文に貧瞋の煩惱が白道を湿したり焼いたりするという表現があり、他力の信心を得たとしても貧瞋の煩惱は消えないけれども、真実信心の白道をさまたげることはないと真宗において理解されている。

(三) 「清浄願往生心」という信心は勅命に信順する心であること。

「二河譬」の文に「能く清浄の願往生心を生ずる」とあるが、その「清浄願往生心」とは、「真実の勅命に信順する信心であり、釈迦・弥陀二尊のおおせに信順する心であるとする⁽⁵³⁾。」これは『尊号真像銘文⁽⁵⁴⁾』に「釈迦・弥陀二尊の勅命にしたがひてめしにかなふとまふすことばなり⁽⁵⁵⁾。」と示されていることから、真宗において共通の理解とされる。

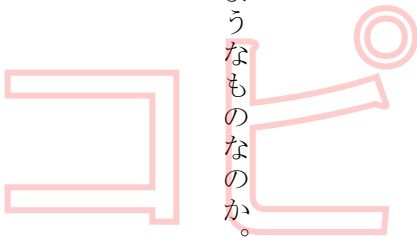
(四)「白道」についての二つの解釈は他力回向義が示されていると見ること。

「二河譬」の合法において、善導は「白道」に二つの意味を含めていた。最初は「清浄願往生心」としての行者の「信心」であるとし、後に「彼の願力の道に乗ずる」と「願力」と釈す。すなわち、「白道」に「信心」と「願力」の二つの解釈を示した。これは、一つのを二つの方向からいわれたものであると見ることが出来る。つまり、他力回向義が示されたと見られる。これらのことから、真宗では「白道」についての二つの解釈によって「他力回向の信心」という義が明らかになったと理解されている。

以上が真宗における「二河譬」解釈の共通の理解である。

第二節 浄土宗他派の「二河譬」解釈

では、浄土宗他派の「二河譬」解釈はどのようなものなのか。鎮西派と西山派の理解について詳しく見ていくことにする⁽⁵⁶⁾。



鎮西派では、「二河譬」は回向発願心を堅固にたもつことを求めるために説かれたと理解している。すなわち、これは「行者の浄土を願生する心が確実ならば、それにつれて行が出てくる。その行さえあれば煩惱が起ることもできず、かりに煩惱が起きたとしても懺悔を生ずる。そこに仏の願力が加わって浄土往生ができるのであるから、行者としてはこの回向発願心を堅固・確実にするのが一番必要なことであるということを示すためにこの譬喩は説かれた⁽⁵⁷⁾」とするのである。

これに対して西山派は、『観無量寿経』の至誠心、深心、回向発願心の三心は回向発願心に帰路すると理解する。回向発願心を主としていることにおいては、鎮西派と同様の理解である。

西山派の解釈では、「回向心によって他力の仏体に目覚め、そこに起る願心によって他力の仏体と一致するといふのである。それまで自力の方ばかり見ていたものが、他力の仏体に目覚めると、自身が往生できる所以は他力の仏体にあると知られ、それによつて往生したいという願心が起り、その願心が他力の仏体と一致して願行具足ということが成立することになる⁽⁵⁸⁾」と理解する。これらのことから、西山派は、善導が「二河譬」を回向発願心の段に説き、願往生の一心を表されたことに注目し、三心の中で回向発願心が重要であり、「二河譬」は回向発願心の解釈であると理解する。

以上が浄土宗他派の「二河譬」解釈である。これらのことから、鎮西派も西山派も「二河譬」を第三の回向発願心を主とする譬喩であると解釈していることがわかる。

第三節 真宗と浄土宗他派の「二河譬」解釈の違い

鎮西派と西山派に対して真宗は「二河譬」を第二の深心の譬喩であると見ている。ここに真宗と浄土宗他派の「二河譬」解釈の違いがあるといえる⁽⁵⁹⁾。

鎮西派と西山派は、解釈にはあるが、いずれも行者側から動いて他力救済を求めようとしている。

対して真宗の解釈では、第二の深心を主とする。これは、「動くことを全て仏において見ていることを示す⁽⁶⁰⁾」ということであり、「他力の行体は、行者の側から動いて一致しようとするのではなく、行体自身に能回向の心も相も具えて行者の方に動いて来るものであるとするのであって、行者はただこれに随順することになる⁽⁶¹⁾」ということである。

これらのことから、真宗と浄土宗他派の「二河譬」解釈では、行者側から他力救済を求めるのか。ただ仏に身を任せ救われるのか。といった違いがあるといえる。

結論

これまで「二河譬」について述べてきたが、これらのことから親鸞が「二河譬」について様々な独自の解釈を

されてきたことがわかる。そして、真宗の共通の理解や浄土宗他派との解釈の違いからも親鸞の「二河譬」解釈の特色が見えてきたといえる。

親鸞において「二河譬」は、『教行信証』「信巻」に用いられるほど重要視しているものであり、自身の体験を投影しているかのように思われる。つまり、「二河譬」は法然との出会いを透視し、その体験を「二河譬」と照らし合されたのではないだろうか。

さらに、親鸞は「二河譬」において様々な障害があるけれども、最大の障害は「自力心」であると示す⁽⁶²⁾。このことから真宗と浄土宗他派との解釈の違いが見られる。「自力心」を最大の障害として見ているところにも親鸞の「二河譬」解釈の特色があるといえる。

また、「二河譬」には、私の置かれている苦悩のあり様と、その苦悩を超える道が、浄土往生という道、仏のよび声への信順という形で、体系的にかつ象徴的に描かれている。二河譬には、読む者に人生の実相を目覚めさせ、人生苦からの解放への道が称名念仏による浄土往生の道にあることを開示するメッセージが込められている⁽⁶³⁾。このように近代文学や現代にも「二河譬」が用いられる要因があるようにも思われる。

「二河譬」の物語性が近代や現代でも受け止められやすく、「二河白道図」などといった絵説きからでも「二河譬」の世界に入り込みやすいといった点で、現代でも多くの人々に親しまれているのではないかと考える。

- (1) 三谷 憲正, 外村 彰, 他 『太宰とかの子』(おうふう・二〇一三年)・一四二―一五一頁
- (2) 『真宗聖教全書』(以下『真宗全』) 一・五三九頁(原漢文)
- (3) 梯 實圓 『白道をゆく―善導大師の生涯と信仰―』(永田文昌堂・二〇〇六年)・一七一―二二頁
- (4) 深川 宣暢 『善導―二河白道の譬喩―』解釈の比較研究序説・真宗伝道の基礎的考察として(『龍谷大學論集 二〇〇七年)・二一九―三〇頁参照
- (5) 杉岡 孝紀 『宗教体験としての二河白道の譬喩』(『真宗学』・二〇一一年)、深川 宣暢 『善導―二河白道の譬喩―』解釈の比較研究序説・真宗伝道の基礎的考察として(『龍谷大學論集 二〇〇七年)、山本 浩信 『二河白道の譬喩の物語性』(『真宗学』・二〇一四年) 参照
- (6) 『真聖全』一・四〇二頁
- (7) 『真聖全』一・八一六頁
- (8) 『真聖全』一・三六七頁
- (9) 『浄土宗全書』(以下『浄全』) 二・三九四頁
- (10) 『大正新修大藏経』(以下『大正蔵』) 十二・四九八頁
- (11) 『大正蔵』二五・三三一頁
- (12) 『西山全書』(以下『西全』) 別巻九・二三〇頁
- (13) 『真聖全』三・二九八頁
- (14) 『西全』七・五三三頁
- (15) 『大正蔵』九・一二頁
- (16) 『真宗叢書』(以下『真叢』) 九・一八六頁
- (17) 『大正蔵』二・三一六頁
- (18) 『愚禿鈔樹心録』四・二四頁
- (19) 『大正蔵』十一・五五九頁

- 〔西全〕三・三四九頁
 〔西全〕三・三四九頁
 〔真叢〕八・二二一頁
 〔新編真宗全書〕十・六百四頁
 〔真叢〕九・一八六頁
 〔真聖全〕一・四〇二頁
 〔大正藏〕十二・四九九頁
 〔大正藏〕二五・三三一頁
 〔大正藏〕九・十二頁
 〔大正藏〕二・三一六頁
 〔大正藏〕十一・五五九頁
 〔真聖全〕一・四六四頁
 〔真聖全〕一・五四頁
 〔真聖全〕一・三七四頁（原漢文）
 深川 宣暢 「善導」二河白道の警喻 解釈の比較研究序説・真宗伝道の基礎的考察として」〔龍谷大學論集 二〇〇七年〕・三四頁
- 〔新編真宗全書〕八・七六一
 〔真聖全〕一・五四頁（原漢文）
 〔真聖全〕一・五三五頁（原漢文）
 〔浄土真宗聖典（註釈版）〕（以下『註釈版』）・二四三頁
 〔註釈版〕・六九三頁
 〔註釈版〕・五三五頁
 〔註釈版〕・四九三頁
 〔註釈版〕・五九〇頁

禁本廠

- (43) 『親鸞聖人御消息』 第十三通、第三十三通（『註釈版』 七六〇頁、七九六頁）
- (44) 杉岡 孝紀 「宗教体験としての二河白道の譬喩」（『真宗学』・二〇一一年）、深川 宣暢 「善導」「二河白道の譬喩」 解釈の比較研究序説…真宗伝道の基礎的考察として」（『龍谷大學論集』 二〇〇七年）、山本 浩信 「二河白道の譬喩の物語性」（『真宗学』・二〇一四年） 参照
- (45) 『註釈版』 二四四頁
- (46) 山本 浩信 「二河白道の譬喩の物語性」（『真宗学』・二〇一四年） 三九二頁
- (47) 杉岡 孝紀 「宗教体験としての二河白道の譬喩」（『真宗学』・二〇一一年） 二一八頁
- (48) 『註釈版』 六九三頁
- (49) 山本 浩信 「二河白道の譬喩の物語性」（『真宗学』・二〇一四年） 三九四頁
- (50) 『註釈版』 五三五頁
- (51) 深川 宣暢 「善導」「二河白道の譬喩」 解釈の比較研究序説…真宗伝道の基礎的考察として」（『龍谷大學論集』 二〇〇七年） 四〇～四三頁 参照
- (52) 三心とは『観無量寿経』の九品段では至誠心と深心と回向発願心を三心とし、『無量寿経』の本願では至心と信楽と欲生を三心とする。この三心は本願では中間の「信楽」一心におさまるとし、これを三心即一という。（『教行信証』信巻・三一問答 『註釈版』二二九頁）
- (53) 深川 宣暢 「善導」「二河白道の譬喩」 解釈の比較研究序説…真宗伝道の基礎的考察として」（『龍谷大學論集』 二〇〇七年） 四二頁
- (54) 『註釈版』 六四一頁
- (55) 『註釈版』 六五六頁
- (56) 深川 宣暢 「善導」「二河白道の譬喩」 解釈の比較研究序説…真宗伝道の基礎的考察として」（『龍谷大學論集』 二〇〇七年） 四三～四四頁 参照
- (57) 深川 宣暢 「善導」「二河白道の譬喩」 解釈の比較研究序説…真宗伝道の基礎的考察として」（『龍谷大學論集』 二〇〇七年） 四三頁
- (58) 深川 宣暢 「善導」「二河白道の譬喩」 解釈の比較研究序説…真宗伝道の基礎的考察として」（『龍谷大學論集』

- (59) 二〇〇七年)・四四頁
 深川 宣暢 「善導「二河白道の譬喩」解釈の比較研究序説・真宗伝道の基礎的考察として」(『龍谷大學論集』二〇〇七年)・四四〜四五頁参照
- (60) 深川 宣暢 「善導「二河白道の譬喩」解釈の比較研究序説・真宗伝道の基礎的考察として」(『龍谷大學論集』二〇〇七年)・四五頁
- (61) 深川 宣暢 「善導「二河白道の譬喩」解釈の比較研究序説・真宗伝道の基礎的考察として」(『龍谷大學論集』二〇〇七年)・四五頁
- (62) 『愚禿鈔』において白道に対して白路を示し、「六度万行、定散なり。これすなはち自力小善の路なり。」(『註釈版』五三五頁)として、方便の教えとして聖道門の教えがされている。その行業を修する内実の自力心は「定散自力の心」と示された。(山本浩信「二河白道の譬喩の物語性」(『真宗学』・二〇一四年)参照)
- (63) 山本 浩信 「二河白道の譬喩の物語性」(『真宗学』・二〇一四年)・三九一頁

参考文献

書籍

- 大森 忍 『二河白道のおしえ』 法蔵館 一九八五年
- 梯 實圓 『白道をゆく―善導大師の生涯と信仰―』 永田文昌堂 二〇〇六年
- 梯 實圓 『一念多念文意講讀』 永田文昌堂 二〇〇五年
- 金岡 秀友, 柳川 啓一, 他 『仏教文化事典』 佼成出版社 一九八九年
- 杉 紫朗 『二河譬の三家観』 興教書院 一九二八年
- 杉 紫朗 『西鎮教義概論』 龍谷大学出版部 一九二四年
- 三谷 憲正, 外村 彰, 他 『太宰とかの子』 おうふう 二〇一三年
- 村上 速水 『親鸞教義とその背景』 永田文昌堂 一九八七年

論文

- 石上 善応 「二河白道図の唱導（地獄・極楽の文芸へ特集Ⅴ）・（地獄・極楽の唱導と美術） 『国文学解釈と鑑賞』 二〇〇八年
- 石原 斌夫 「親鸞と二河白道諭」 『印度学仏教学研究』 二〇一二年
- 加須屋 誠 「二河白道図試論・その教理的背景と図様構成の問題」 『美術史』 二〇〇二年
- 加藤 善朗 「一遍における二河白道図：絵画と儀礼とのかかわり」 『密教図像』 二〇一二年
- 杉岡 孝紀 「宗教体験としての二河白道の譬喩」 『真宗学』 二〇一一年
- 花山 孝介 「能生清浄願心・二河譬」 についての考察 『親鸞教学』 一九九七年
- 深川 宣暢 「善導 二河白道の譬喩」 解釈の比較研究序説・真宗伝道の基礎的考察として 『龍谷大學論集』 二〇〇七年
- 松山 智道 「三願転入と二河譬」 『高田学報』 二〇一三年
- 蓑島 和潤 「親鸞における二河譬の意義」 『印度學佛教学研究』 二〇〇一年
- 蓑島 和潤 「二河譬の意義についての覚え書・親鸞の信の形成過程を探ねて」 『真宗学』 二〇〇三年
- 宮島 磨 「善導『観無量寿経疏』における「二河白道諭」をめぐる」 『人文社会論叢・人文科学篇』 一九九九年
- 森慶樹 「二河白道の研究」 『行信学報』 二〇一三年
- 山本 浩信 「真宗における「二河譬」の宗教経験的意義」 『宗教研究』 二〇〇九年
- 山本 浩信 「二河白道の譬喩の物語性」 『真宗学』 二〇一四年

禁

コト